

<文化財の種類 有形文化財（書跡・典籍）>

名 称	こんごうじいっさいきょう 金剛寺一切経
員 数	4461 卷 24 帖 2 枚
所在地	河内長野市天野町 996 番地
所有者	宗教法人 天野山金剛寺
年 代	平安時代前期から江戸時代中期まで
<p>説 明</p> <p>○概要</p> <p>金剛寺一切経は、天野山金剛寺（以下、金剛寺。河内長野市）が所蔵する 4461 卷 24 帖 2 枚¹にて構成された、まとまって伝来する府内唯一の写本一切経である。</p> <p>本一切経は、鎌倉時代前期から中期にかけて金剛寺およびその周辺地域の寺社等にて書写した経巻と、既に平安時代以来各所にて書写されていた経巻を併せることで形作られた。この中には、中国唐代の経巻に基づく本文をとどめる奈良時代写経を転写した経巻も多数含まれる²。</p> <p>○金剛寺における一切経の書写</p> <p>一切経とは、体系的に集積した数多の仏教經典のことで、経・律・論の三蔵のみならず中国の高僧らが著した中国撰述の注釈書類等も加えた、仏教典籍の集大成というべき經典群である。</p> <p>金剛寺は、行基の開創で、空海修行の地とされるが、その後荒廃する。金剛寺の再興は平安院政期のことで、聖地房阿観（1136～1207）が弘法大師空海の御影供を始めたと伝わる承安2年（1172）、あるいは金堂が建立された治承2年（1178）とされる。金剛寺一切経の書写事業は、『施焰口餓鬼陀羅尼経』の奥書に「承元第二年六月七日、於河内国金剛寺書写已畢」と記されることから、阿観の没した翌年となる承元2年（1208）に開始されたと考えられている。以降、嘉禎3年（1237）を最多として書写奥書を有する経巻が多く見いだされ、建長3年（1251）より後は急速に書写にかかる奥書が見えなくなる。このことから、金剛寺を拠点とする書写事業は承元2年に開始、嘉禎3年頃に最も活発な書写活動がなされ、ほどなく大部分の書写が終了したとされる。金剛寺の山内における書写場所として、北房、東谷、塔本房、如意院、北谷不動院、中院、極楽院、光明心院などが奥書から確認できる。</p> <p>こののち、文永10年（1273）年に「金剛寺安置一切経之内、未加点之間、（中略）、仍加点而納寺」と記された『成唯識論 卷六』の奥書のごとく、加点にかかわる奥書が現れる。この頃には金剛寺に整えられた一切経を用いて、訓読のための訓点を付すなど修学のなされたことが知ら</p>	

れる。また、南北朝時代の文中元年（1372）に『大般若波羅密多經』卷第五十三および卷第五十五などが補写されたこと、江戸時代中期の正徳4年（1714）には『羅摩伽經』や『摩訶般若波羅蜜道行經』『小品般若波羅蜜經』などが修理のうへ折本に改装されるとともに、欠本は黄檗版をもって補写されたことなどが奥書より判明する。長きにわたって整備や護持のなされてきたことがうかがえる。

○金剛寺周辺寺院における書写

本一切經には、金剛寺周辺地域の寺院などにて書写された経巻も数多く伝存する。奥書に「金剛寺一切經内」などと明記される事例として、貞応3年（1224）に和泉国南郡山直郷の大日寺（岸和田市）にて書写された『雜一阿含經 卷第十一』『雜一阿含經 卷第二十』や、嘉禎2年（1236）に同国塩穴郷石津村の念仏寺（堺市）にて書写された『十誦羯摩比丘要用法』『善見律毘婆沙 卷第四』、同3年に同国和田郷下条菱木村（堺市）の釈尊寺にて書写された『撰大乘論釈 卷第十』、同年に同国泉郡上条郷豊中村（堺市）にて書写された『広弘明集 卷第三』などがあげられる。金剛寺にて書写を進めると同時に、各所に散在する貴重な仏典の写本を求め、周辺地域の寺院などにて書写を行っている様子がうかがえる。

このほか、奥書などに金剛寺一切經とは記されないものの、同時期に書写され、金剛寺に伝えられた経巻も数多く存在する。例えば、河内国内において書写された経巻として、寛喜2年（1230）に錦部郡宇礼志郷の結縁院（富田林市）にて書写された『薩婆多毘婆沙 卷第一』や、嘉禎3年に丹北西条郡矢田部郷の善福寺（大阪市）にて書写された『四分律 卷第五十三』などがある。また、和泉国内での写経として、嘉祿3年（1227）に大鳥郡の長承寺（堺市）にて書写された『根本説一切有部毘奈耶雜事 卷第三十一』や、貞永元年（1232）に日根郡淡輪辺（岬町）で書写された『阿毘曇八揅度論 卷第二十二』、嘉禎2年（1236）に土塔山（堺市）にて書写された『大周刊定衆經目錄 卷第五』、そして同3年に泉郡の楨尾寺（和泉市）にて書写された『阿毘達磨俱舍論 卷第十八』『広弘明集 卷第十八』、向井村（堺市）にて書写された『弘明集』、和田郷下条の栄多寺（堺市）にて書写された『一切經音義 卷第十』、日根郡近木の地藏堂（貝塚市）にて書写された『一切經音義 卷第四』などが伝存する。

○平安・鎌倉写経の収集

金剛寺一切經は、そのほとんどが鎌倉時代に書写された経巻で構成されている。しかし、この一切經中には、阿観による金剛寺の再興期、あるいは書写事業の開始時期を遡る年代を記した、書写や校合の奥書を有する経巻も見いだすことができる。特筆すべきものとして、本一切經中にて奥書から書写年代が判明する最も古い経巻である承暦3年（1079）書写の『大般若波羅密多經 卷四百』を含む大般若經約三百巻や、保延5年（1139）書写の『大唐慈恩寺三蔵法師伝』など僧快尋が発願した一切經の一部、応保2年（1162）書写の『顯揚聖教論』など大鳥郡深井郷（堺市）八田寺の一切經の一部、そして建久7年（1196）書写の『五部大乘經』などを含む僧栄印発願の紀伊国丹生都比売神社とみなされる天野宮一切經の一部などが挙げられる。このほかにも、長

承4年(1135)に和田郷中条(堺市)の行墓院野々井寺住僧らが書写した『経律異相 卷第三十五』や、康治2年(1143)に常楽寺(堺市)の御塔供養料経として書写された『大方広仏華嚴経 卷第三十八』なども伝わる。また、書写の年紀は記されないものの、もう一組、字体や料紙といった形態から平安時代前期の書写と判断される大般若経約六百巻も現存する。これらの経巻は、13世紀初頭から金剛寺にて一切経書写事業が進められる間、既に平安時代以来書写され存在していた経巻の施入もしくは収集もなされたため、金剛寺に伝来したと考えられている。

○金剛寺一切経と奈良写経

金剛寺一切経中には、いわゆる古逸経典が遺存することも注目される。例えば、本一切経中より見いだされた後漢代の安世高訳『十二門経』は、隋代の仁寿2年(602)に成立した『衆経目録』で既に欠本と記されており、7世紀初頭には散逸していた経典であった。また、安世高訳『安般守意経』をはじめとして、『仏説七女経』『五王経』『餓鬼報応経』『集諸経礼懺儀』などは、現在流布する10世紀以降に成立した宋版や高麗版といった刊本一切経系統の文言と大きく相違する異本であり、その文言は奈良写経である正倉院聖語蔵本と多く一致することが明らかにされている。奈良時代の写経は、隋・唐代の本文を反映しており、敦煌写経とも親近性を有するとされる。金剛寺一切経は平安時代以降に書写された写経であるが、しかし、その藍本として奈良時代の写経もしくはその転写本を用いたものが存するため、宋版や高麗版といった刊本とは異なる経典や本文を伝えていとされる。

○評価

金剛寺一切経は、その大半が平安時代から鎌倉時代中期にかけて金剛寺および周辺地域の寺社などにて書写された経巻で構成される、まとまって伝わる府内唯一の書写一切経である。本一切経には、書写や校合などの奥書が数多く記されており、書写の年代や場所、人物そして願意などを知ることが出来る。このことから、中世における金剛寺史のみならず、河内国および和泉国の地域史や文化史を理解する上で非常に重要である。加えて、僧侶の学問的営為により訓点を付された経巻や、加点年を記した奥書を持つ経巻が存することから、当時の訓読を知ることができ国語学上においても貴重である。また金剛寺一切経は、主たる藍本が奈良時代の写経もしくはその転写本と考えられており、既に散逸したとされてきた経典を蔵することや、宋版など刊本一切経系統とは異なる本文を記す経典を多数含む資料群であることから、日本列島のみならず東アジアにおける仏教学上の資料的意義も大きい。以上より金剛寺一切経は、歴史学、国語学、仏教学などの学術研究上において非常に価値が高いといえ、本府指定文化財にふさわしい。

註

(註1) 金剛寺一切経を構成する経巻のうち、既に国の重要文化財として大正4年(1915)に指定された後村上天皇の奥書を有する『大般涅槃経』12巻および大正8年指定の『梵漢普賢行願讚』1巻、昭和43年(1968)指定の『宝篋印陀羅尼経』1巻は、この員数に含まない。また本一切経中には、同一名の経典が複数巻存在するものもある。

(註2) 金剛寺一切経は、昭和 11 年 (1936) に東方文化学院東京研究所によってはじめて整理と調査がなされ、その後、昭和 40 年代半ばには河内長野市史編纂事業で調査のうえ史料編等が刊行されるなど、世に広く知られた存在であった。しかし、長らくその全貌は詳らかでなく、落合俊典氏を中心とした研究チームによる、目録を含む調査報告書 (2004、2007) の刊行によってはじめて明らかになった。

[参考文献]

三好鹿雄「金剛寺一切経全貌」(『宗教研究』13-6、1936)

梶浦晋「金剛寺一切経と新出安世高譯佛典」(『佛教学セミナー』73、2001)

落合俊典編『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究』(科学研究費補助金 (基盤研究 A) 研究成果報告書、2004)

京都国立博物館編『古写経一聖なる文字の世界一』、2004

赤尾栄慶「河内長野金剛寺一切経管見—中間報告にかえて—」(頼富本宏博士還暦記念論文集 刊行会編『マンダラの諸相と文化—頼富本宏博士還暦記念論文集 下(胎蔵界の巻)』法蔵館、2005)

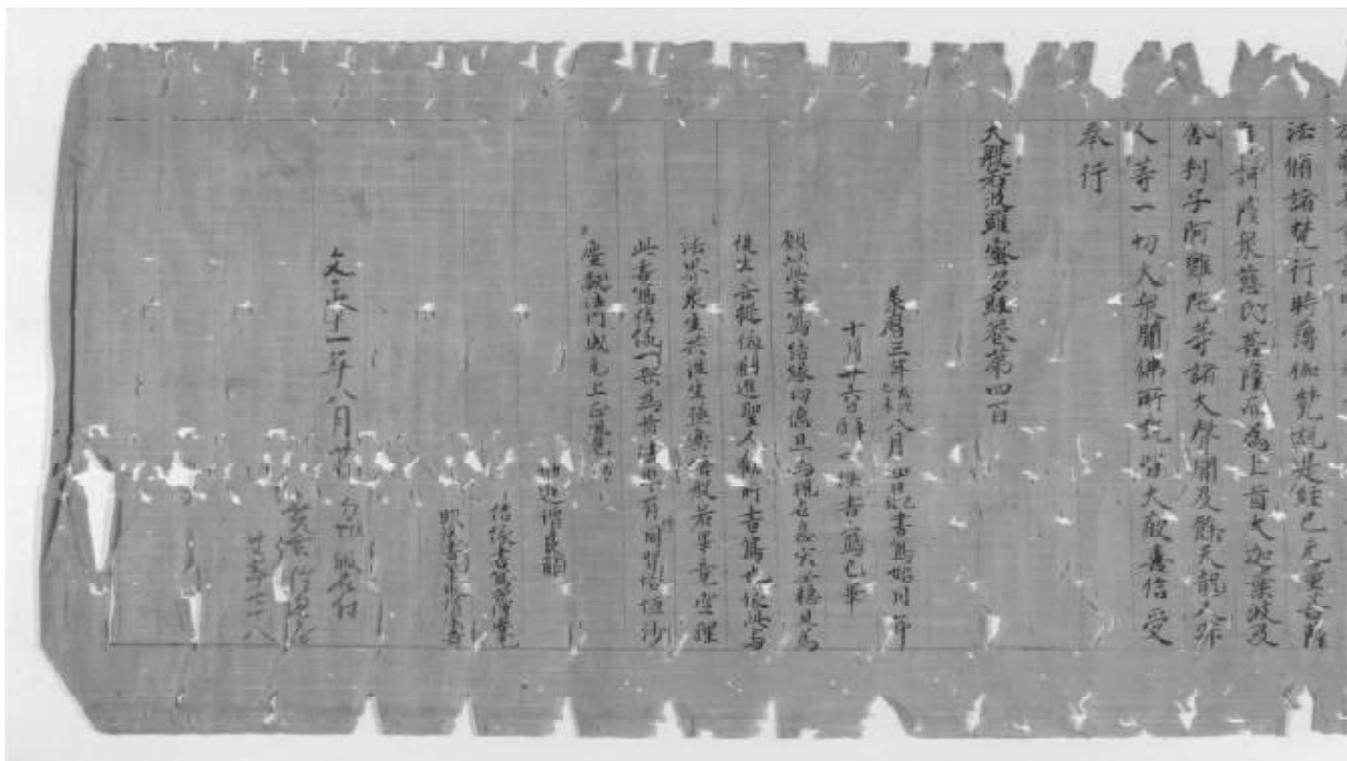
落合俊典編『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』(科学研究費補助金 (基盤研究 A) 研究成果報告書、2007)

大塚紀弘「天野山金剛寺一切経の来歴について」(『寺院史研究』15、2016)

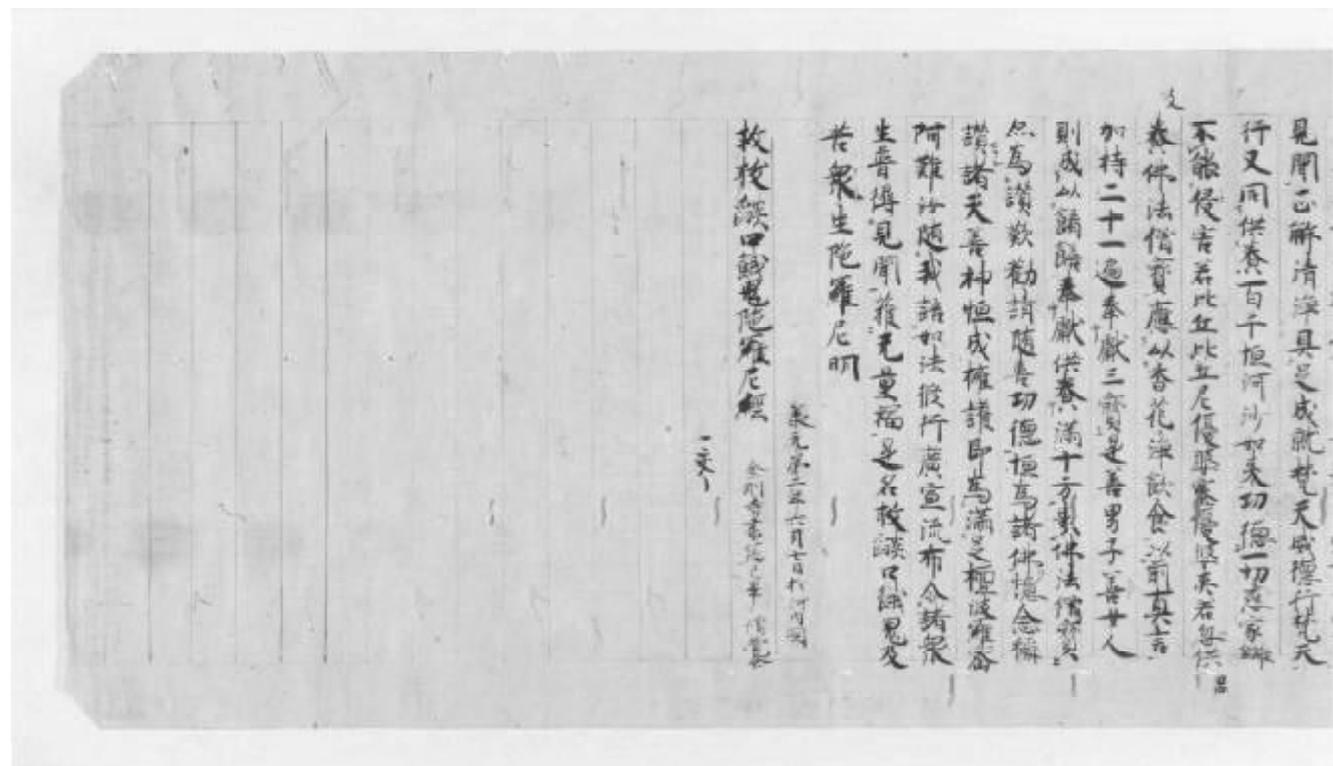
堺市博物館編『堺・経典をめぐる文化史』、2018

堀川亜由美「天野山金剛寺一切経奥書からみる和泉、河内地域の寺院、人物」(堺市博物館編『堺市博物館研究報告』第 38 号、2019)

京都仏教各宗学校連合会編『新編 大蔵経—成立と変遷』法蔵館、2020



『大般若波羅密多經 卷第四百』卷末



『施焰口餓鬼陀羅尼經』卷末

等亦得緣上於勝地法生候等故大八論說
上亦緣下下緣等相應是故覺於釋子赴
論說故攝不緣下非兩情故二十字非應字元字
攝此但是論彼唯律故後十在通見循所斷
其二煩惱相應是故八所斷者隨進諦相或
覺或別煩惱俱生故隨所應皆通四部是諦
觀鍊等皆如煩惱隨前十有義唯備所斷緣
庶乘境止進生故有義下進見備所斷依二
煩惱勢力赴故緣他見等生念等故見可斷
者通下依緣惣別吸力皆通四部此中有義
念等但緣進諦或生非親進諦行相非進不
進致故有義假等亦親進諦於滅道等生假
等故彼念等十但緣有事要說本質方信說
緣有漏等唯上應知

成唯識論卷第六

今則字十五一切皆以月中如遊一而兩森然同流下等分
近不故下也仍如遊之仰身已生學法二一證悟也
去正明之也所文火十年五月二日一日如遊山門

元日

『成唯識論 卷第六』 卷末

嫉妬瞋眠調貪欲是思法毒人至現欺至竟不解
是欲當獲嫉妬及瞋調亦當檢檢莫違過行
是欲諸比丘當舍棄嫉妬元限該心常行
惠施不着瞋眠當行不淨不着貪欲如人諸
比丘當住是學念時諸比丘聞佛所說 歡喜
奉行

聞如是一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園舍
時世尊告諸比丘有此三法習之說之不知
厭足亦復不能至休息處方何為三謂貪
欲若有人習此法初元厭足若復有人習欲
得若初元厭足若復有人備習瞋眠初元厭
足是謂比丘若有人習此三法若初元厭足
亦復不能至休息之處是謂諸比丘當捨
離此三法不親近之如是諸比丘當作是學
念時諸比丘聞佛所說歡喜奉行

供養三善根三痛三覆露相法三不覺 受教先覺

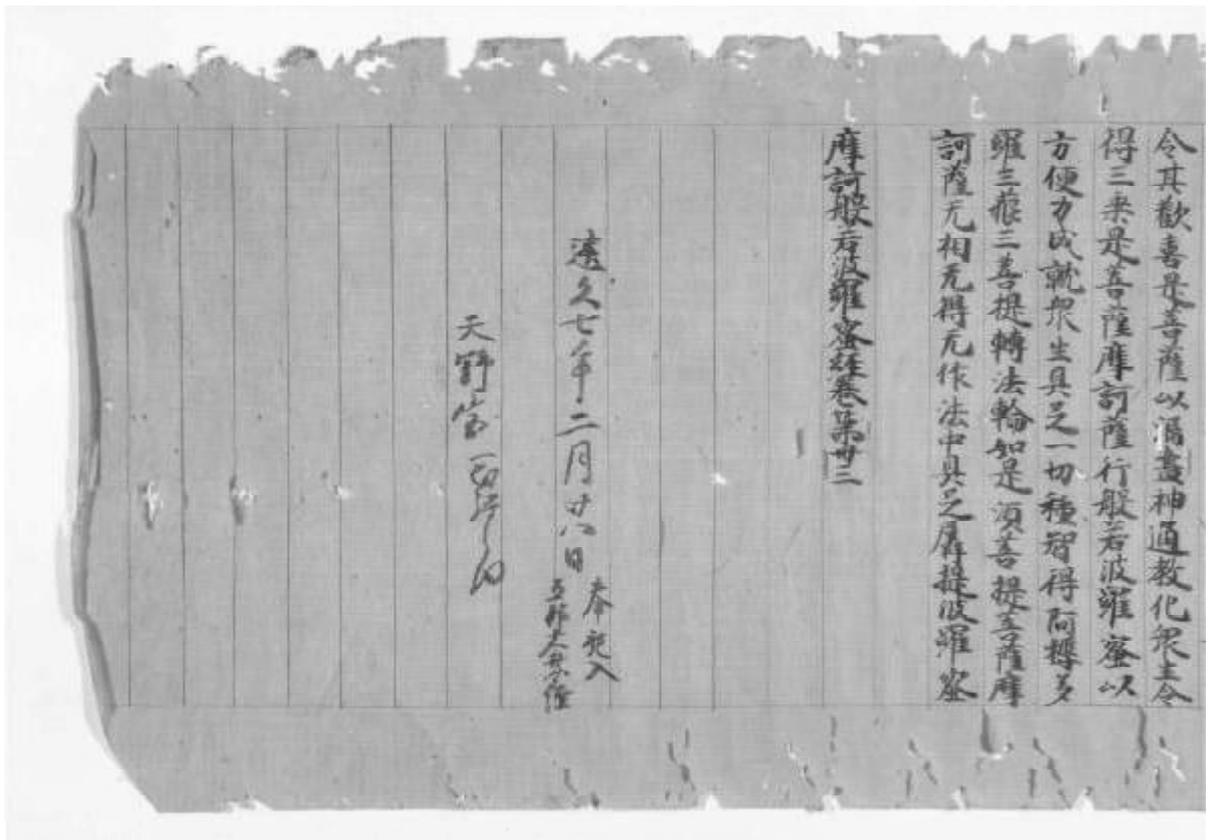
增壹阿含經卷第十一

(一)

河滿錦對全剛等一切任本進定法河外能佛聖
靈三千五百佛休妻和東海南島大日寺陸住長年

自八月十月廿二日一經一也

『雜一阿含經 卷第十一』 卷末

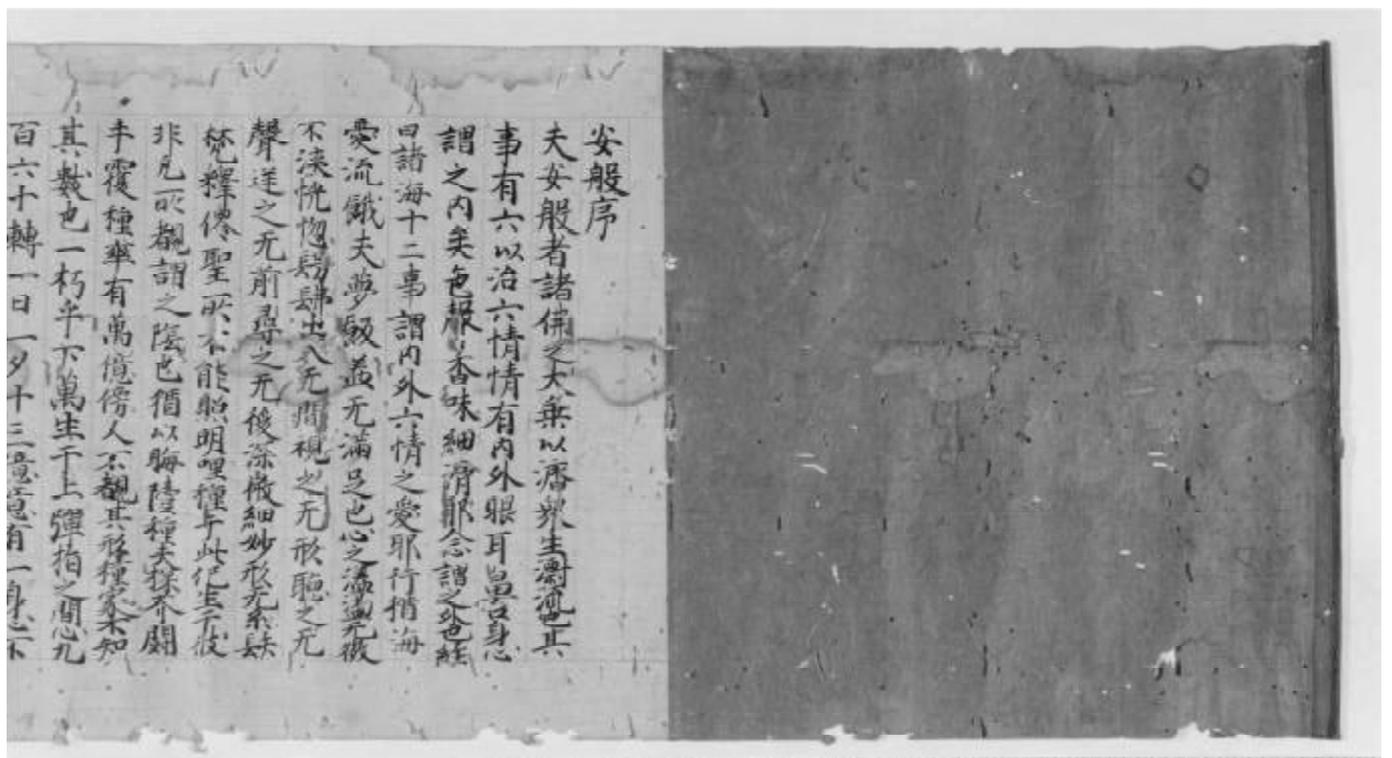


令其歡喜是菩薩以漏盡神通教化衆生令
 得三乘是菩薩摩訶薩行般若波羅蜜以
 方便力成就衆生具足一切種智得阿耨多
 羅三藐三菩提轉法輪如是須菩提善哉善哉
 摩訶薩無相無得無作法中具足菩提波羅蜜

遠文七年二月廿六日
 奉充入
 五部大藏

天野宮 百片白

『摩訶般若波羅蜜經 卷第三十三』 卷末



安般序

夫安般者諸佛之大乘以濟衆生壽世其
 事有六以治六情情有內外眼耳鼻身心
 謂之內美色聲香味細滑耶念謂之外色聲
 曰諸海十二事謂內外六情之愛耶行指海
 愛流鐵夫夢駭並充滿足也之瀛渤光徹
 不淡恍惚歸出入元開視之无形聽之无
 聲達之无前尋之无後益微細妙形无象殊
 梵釋佛聖不能照明聖檀于此化生亦彼
 非凡所觀謂之陰也猶以晦陸檀夫探不闕
 手覆種華有萬億傍人不觀其種種象不知
 其數也一朽乎下萬生千上彈指之間凡
 百六十轉一日一夕十三意息自一身下

『安般守意經· 仏説十二門經· 仏説解十二門經』 卷首